



高木市之助全集

第八卷

講談社

高木市之助全集 第八卷

定価三八〇〇円

湖畔・抒情の方法

昭和五十二年一月二十日 第一刷発行

著者 高木市之助

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二・郵便番号一一二

電話・東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

振替・東京八一三九三〇

印刷所 株式会社精興社

製本所 牧製本印刷株式会社

©高木市之助 昭和五十二年

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

目次

I 湖畔

改版にさいして	4
はしがき	6
湖畔——ワーズワスの詩蹟を訪ねて	
第一章 湖畔の風	10
第二章 鳩庵	21
第三章 孤村の夕	49
第四章 林に迷う	70
第五章 ヘルヴェリン	87
第六章 水仙の花	101

湖水地方解説	121
--------	-----

II 抒情の方法

一

短歌の社会性	131
歌論史上における撰集の意義	151
短歌の伝統	158
日本の抒情詩	165
短歌と古代	182
歌のしらべと日本人——少しばかり放談ふうに	195
日本文学の特質	206
古典における日本語の美——良寛をめぐって	213
和歌の本質について	221
短歌における創作の論理	239

短歌の世界と文学の世界	242
-------------	-----

実作家の圏外から	247
----------	-----

二

今様は七五調にあらず	252
------------	-----

再び今様の形式について——藤田氏に答う	265
---------------------	-----

楚囚之詩——と The Prisoner of Chillon	281
---------------------------------	-----

賢治と啄木における短歌の問題	289
----------------	-----

詩として観た俳句	300
----------	-----

しらたまの歌	308
--------	-----

牧水と平賀春郊	312
---------	-----

詩歌におけるジャンル——古典詩歌のジャンルとジャンルの間	316
------------------------------	-----

山家鳥虫歌と近世民謡の一面	325
---------------	-----

民謡と山家鳥虫歌	407
----------	-----

黒沢田楽を観る記	422
----------	-----

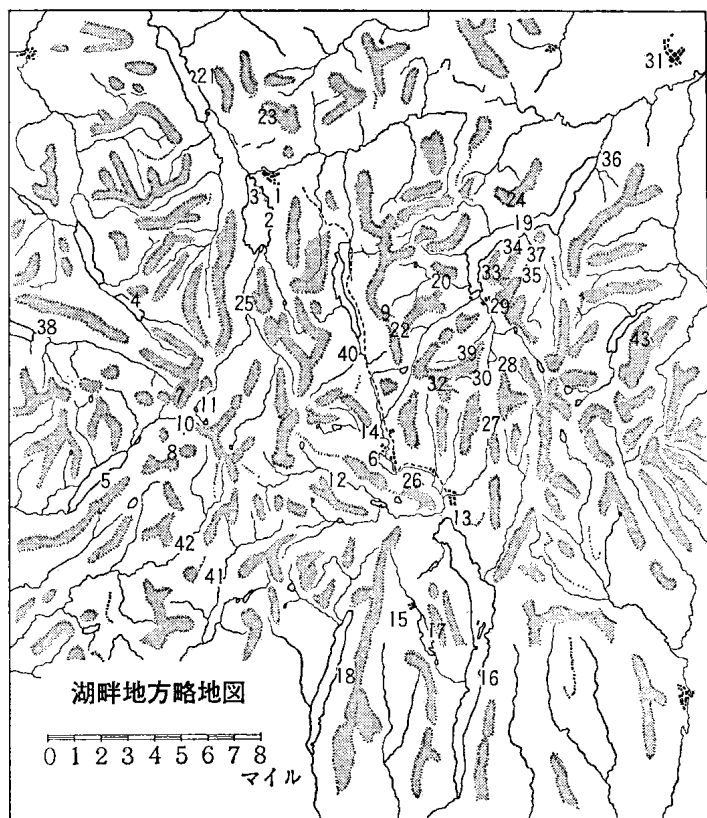
佐渡と越後は	436
--------	-----

万葉集

一 万葉集とは	445
二 民謡から文学へ	449
三 鮎走る吉野の滝	461
四 遠のみかど	480
五 むすび	503
附 万葉集の研究	505
解説	510
工藤好美	
深萱和男	
解題	522

I
湖
畔

- | | | | |
|----|-------------|----|-----------|
| 1 | ケズイック | 23 | スキドウ |
| 2 | ダーウエントウォータ | 24 | ゴウバロウパーク |
| 3 | フライアスクラッグ | 25 | ボロウデイル |
| 4 | バタミヤ | 26 | ライダルミア |
| 5 | ワストウォータ | 27 | カークストンパス |
| 6 | グラスミヤ | 28 | ブラザースウォータ |
| 7 | グレイトゲープル | 29 | バタデイル |
| 8 | スコフェルバイク | 30 | ハーツオブ |
| 9 | ヘルヴェリン | 31 | ベリンズ |
| 10 | スタイヘッドパス | 32 | グリスデイル |
| 11 | スタイヘッドターン | 33 | プレイスフェル |
| 12 | ラングデイル | 34 | サンドウィック |
| 13 | アングルサイド | 35 | マーティンデイル |
| 14 | ローデイ川 | 36 | ブーリーブリッジ |
| 15 | ホウクスヘッド | 37 | ボアデイル |
| 16 | ウインダミヤ | 38 | エンナデイル |
| 17 | エスウェイトウォータ | 39 | ディープデイル |
| 18 | コニストンウォータ | 40 | ワイスパーン |
| 19 | アルズウォータ | 41 | ダッドン |
| 20 | グレンリッディンベック | 42 | エスイデイル |
| 21 | バセントウェイト湖 | 43 | ホーズウォータ |
| 22 | レッドターン | | |



改版にさいして

初版はいろいろの意味で、まったく意に満たないものだった。たとえばその当時湖畔で試みた私の拙い、しかし思い出の多いスケッチを口絵に挿入するつもりだったのを、出版所でなくしたり、私自身の構想した装釘がすっかり別物になったり、責任校了として任せたものが、あんなにも誤植だらけだったり等々。一方、それにもかかわらず、本書の部分が教科書に抄出されたり、入試問題に選ばれたりしたために、本書が既知未知の人々から、直接著者へ注文されることもしばしばだった。そんなこんな事情が今度の、平凡社の好意による新しい出版となった機縁といえば機縁であろう。私はつい二、三日前、忙しい間を縫うようにして、浜名湖畔の館山寺というところに、きさらぎさむの一夜を過ごして、誤植の訂正、多少の原文修正を試みた。おりから宿のガラス戸越しに、いざよいの月が上って、静かに、まったく本文の旅の、どの日どの湖水よりもっと静かに私の机を照らした。いく度か私は、ペンをとどめて電燈を消し、湖上の銀波を眺めながら、そのかみの英国の旅を思い出し、またこの国の古典にうたわれないなさ細江のいにしえを偲んだ。それはどこまでもきびしかるべきこの夜の仕事に、あらずもがなの感傷を加えたにすぎなかったかもしれないが、それにしても「湖畔」重版の過程にはいかにもふさわしいひとこまだなどと考えながら、多忙な私はそれをそのまま平凡社へまわすことを余儀なくされた。もっとも私はこんなびほう的な正誤や修正に満足しているものではないが、ただ、一部を教科書に採択してくださった編集の方々や、それを読んでくださる先生や生徒

や、もちろん一冊を通して読んでくださった一般の読者に対して、この浜名湖畔の一夜が、初版に負うている私の責任みたいなものを多少とも軽くしたことは事実であろう。

なお改版にさいし、挿画は全部新たにしてみた。湖水地方の略図は G. M. HARPER の WILLIAM WORDSWORTH 第一巻の口絵その他を参考して作製したもので、地名（湖水、山岳、都市部落その他）は本書で言及しているものはすべて採択したつもり。また三葉の古版画は ERNEST DE SELINCOURT が今から五十余年前に、ワーズワス当時の版画として複製した五葉の中から特に本書に向きそうな三葉を選んで、さらに複製したものである。

一九五七年二月

ふたたび

著 者

はしがき

この本には、はしがきなどないほうがいい。なぜなら、それは、予備的な心がまえなしに読んでもらいたい本だから。ただし、この本はただの遊記のつもりではない。私は湖畔を歩きまわる「私」の行動に、一々地理的歴史的ないし記録的責任を負うことはできない。このことだけはこわっておくべきであろう。いったい私は、まちががなく英国に留学もしていたし、またたしかに湖水地方を旅行もしてきた男である。しかし私が事実として読者に保障しうることはただそれだけである。本文中で私がさもまことしやかに、こまごまと書きつづることどもは、必ずしも一千九百年の何月何日に身をもつて経験した事実とは限らない。かと言ってすべてがすべて嘘で固めたこしらえごとでもない。まあいわば、近松ではないが、虚実皮膜の間を行こうという、一風変わった遊記のつもりである。現に私はこの本でしているように、ワーズワスに傾倒しているし、湖水地方はこの本で描いているように美しいところにちがいないと信じている。そればかりか、文藝における自然と詩人との関係についても、あるいは東西文藝のありかたについても、これが私の文藝論だといってもいいものがこの本でわかってもらえるとこれもひそかに信じている。文藝は、卑見によれば、私などがよく専門の雑誌に書かされる、あのようなしかつめらしい「論文」によって論ぜられるよりは、もう少し別の形によって扱われなければならないのではないか、とさえ思う。そのための一つの試作だといつては、あまりに思いあがった考え方であらうか。

英詩に一々原詩を添えたのは、体裁上も煩わしいようであるが、もし訳文だけでも間にあいそうだのにと考える読者があるなら、私はその人と正反対な考えを持っていることをこの機会にこれも「はしがき」しなければならぬことかもしれない。私はむしろ原詩だけでも間にあったと考えたいのだが、それでは英語に縁のない人々に迷惑をかけると思ってあえて蛇足を加えたまでである。訳は御覧のとおり拙いし、誤謬も少なくないと思うが、専門でない私としてはなんともいたし方ないこととして読者の寛容を乞うほかはない。ただどのような名訳をもってしても、この本から原詩を除く気になれなかったことだけは、この私の訳の拙劣とは無関係に、ここにはっきりさせておきたい。この筆法からすれば、最後のワーズワスの巡遊記の抄訳にも原文を付すべきだと思うが、英語の教科書ないし参考書でもない本書としては、それは読者のためにむしろ割愛すべきだと思ったのでよし。つまりこの本は、世の中に一冊ぐらいあっても悪くはない本の一つであり、それでたくさんな本でもある。

一九五〇年四月

詩聖百年忌にあたりて

著 者

湖 畔

——ワーズワスの詩蹟を訪ねて——

第一章 湖畔の風

それは、つい昨日のようでもあり、またはろばろと見るかす昔のこともようでもある。私が暑苦しいオックスフォードの夏を避けるために、宿願の湖水地方へ小さな旅行を試みたのは、たしかに八月の中旬だったはずである。なぜなら、当時浦和の留守宅で私の帰朝を待っていた子どものところへ送った私の絵葉書を調べてみたら、スタンプにおぼろげながら、17. Aug. と日付が読まれるからだ。

三月の末にロンドンからオックスフォードに移って以来、ずっと聴講や図書館通いに単調な生活を続けてきた私にとって、このささやかな数日のひとり旅がどんなに楽しいものだったか。それは今でもなおはっきり当時の旅装を思い出すことができるという一事でもわかる。薄鼠色、カシミヤのサマ―・スーツは仕立おろしといってもいいほど新しかった。チョッキにはこれも買って間もない懷中時計がかすかにセコンドを刻んでいた。それはオックスフォードの下宿から図書館へ通う大通りの、そうして毎日のように立ち寄る古本屋の隣の、小さな時計屋の窓に飾ってあった——というよりも、むしろさらされてあったのだが、その漆黒の鉄側が妙に私の興味を惹いたのだ。なけなしの留学費は私にいくたびこの時計屋へ入ることを躊躇させたであらう。でも或る日の午後、図書館からの帰り途に、私は思いきってこの店のドアを押した。時計の文字板にはまことに簡素に OXFORD と記されてい